



▲安全で安心な古河花火大会を運営するため、警察署、消防署などの協力をいただきました

「カウントダウンがはじまります。会場のみなさんも、一緒におねがいします」

「それでは、10、9、8……ゼロ。スタート！」

ヒュルルルルルルルルルル、ドォン、パッパッ。パッパッパッパッ。渡良瀬の中天に花火玉が一斉に炸裂。古河花火大会がはじまった。名のある花火師の力作が次々と披露され、あたかも空中絵巻をみているようだ。光と音楽の共演に酔いしれる大観衆。熱気と興奮に包まれながら、真夏の夜の祭典は次第に佳境に入っていた。

古河花火大会をインターネットで検索すると、打ち上げ数が「日本で二番目(2万5000発)」とある。観客数

約55万人。久喜市や小山市まで、ホテルの予約がいっぱいになるとか。

古河市と関係の深い国・県の担当職員をはじめ、姉妹都市や交流都市のみなさんも観客席に多数いらっしやる。「すごい！来てよかった」「これだけの花火は観られない」「ワイドスターマインに感激。闇を彩る芸術だ」などと感動の声。

「美しすぎて涙が止まりません。故郷の海や山河が眼に浮かんでしまつて。本当にありがとうございます」。

## 炎天下の警察官

いまだ市内で避難生活を余儀なくされる福島県からの被災者の、古河花火大会「ご招待」への感謝の言葉だ。

合併後の古河市は、四季を通してイベントが目白押しだ。野外で快適に過ごせる春秋のシーズンが特に多い。それだけに実行委員やボランティアの苦労が絶えない。

ときには警察官や消防署(団)員まで多数動員されることも。

花火大会当日は、昼も夜も会場周辺

が大渋滞になる。特設駐車場から会場まで歩く道のりは意外と長い。

炎天下。風景が光を反射して眩しい。直射日光と放射熱とで頭がポーンとなりそう。

警察官が額に汗してあちこちに立っている。人や車を誘導しているのだ。いずれも表情がキリリとして動きにムダがない。

交通整理は拳銃を携帯しなくてもいいので、さぞかし夏服は着心地が良いのだろうと署長に尋ねたら、シロウトの思慮の浅さを知り恥ずかしくなつた。

「もしもの場合に備えて、全員が制服の上に防刃チョッキを着けています」「夏は防刃チョッキ(中の鉄板)が熱せられるのできわめて暑く、冬は鉄板が冷えて寒さが一段と身にしみます」との説明。

路上の警察官にふたたび視線が戻り、アタマが自然に下がってしまった。

古河市長

菅谷 憲一郎

